

---

# 金ファン番外～それもまた他愛無い日常～

コニ・タン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金ファン番外〜それもまた他愛無い日常〜

### 【Nコード】

N0490J

### 【作者名】

コニ・タン

### 【あらすじ】

その日、山上鳥本は軽い足取りで喫茶店へと向かっていた。仕事  
が早く終わり、好物のケーキを食べようと意気込んでいたのだ。だ  
が道中で行き倒れを見つけ　？

正体不明先生作「金持ちはファンタジー！」の番外編、コニ・タン  
テイストでお送りします、そんな企画作。

## （前書き）

このお話は正体不明先生の「金持ちはファンタジー！」の番外という位置づけになっております。そちらを読んでいないと理解できない物語なので、ご了承下さい。

空が光っていた。星が落ちてきたんじゃないかって思うほど、綺麗で眩しい光が目を焼いていく。

私は獣、道化者。頑張つて、結局何も手に入らなかった道化者。何でこんな事をやりたかったのか分からない、でもやり遂げた。でもでも、世界は何も変わらない。

腹が立つ、憎んでいる。自分になのか他人になのか分からない。ああ、このままだとまた何か殺してしまいそう。

多分、私はこれで死ぬだろう。

だから最後に一言、遺言でも残しておこうか。

「金持ちは、嫌いだ」

\*\*\*

その日、山上財閥のトップである高校生、やまのうえ山上 とりもと鳥本は一人で喫茶店「アナザー」に向かっていた。その日の仕事はある程度終わったので、息抜きの為に好物のケーキを食べに来たのだった。

「ふう……やはり、たまにはゆっくりするのもいいな」

女性のような柔らかな顔に微かに微笑みを浮かべ、比較的軽い足取りで喫茶店へと向かう。普段の彼を知る人間ならば軽く引くぐらいの気の抜きっぷりである。食べ物魔力は恐ろしい。

「ん……？」

と、軽やかだった歩みが急に止まる。眉は怪訝そうな八の字へ、

口からは声が漏れる。視線は目の前へ、目の前で倒れているソレへと向けられていた。

和服だった、ご丁寧に履いているのは草履だ。うつ伏せに倒れており、手入れをしているようには見えない長い髪が背まで覆い隠している。それ故に顔が見えず、男か女かも判別できない。

まったく状況が分からず、困惑する鳥本だった。

「がつつはぐはぐもしましやんぐ！ がー！ 美味い！ 五臓六腑が死に絶える！」

「死に絶えてどうする」

喫茶店アナザーの席の一つ、そこで鳥本と和服は向かい合っていた。あの後、急に「は、腹が減ってインザヘヴン……！」などよく分からない事を言い出したので、とりあえず食事をとらせる事にしたのだ。何者であろうと、対応するのはこの後で問題は無い。

和服 凛々しい顔つきだが、おそらくは女。胸がある は凄まじい食いつぶりだった。金の心配はまったく要らないが、ここまですべて並べている姿は目を引きすぎる。

「まったく、ここは特別な空間だからあまり目立ちたくないんだが」

そういう鳥本も、ケーキの皿を100は積み上げていた。二人の食事の終わるタイミングはほぼ同時だ。

「紅茶二つ……トモ、その子誰？」

「『厄介事』だよ」

店員が運んできた紅茶のカップを傾けながら、その店員と軽い問答をする鳥本。知り合いなのだが、何なのか分かっていない和服女は対面で勢いよく紅茶を飲み干している。熱々なのに。

とりあえずは落ち着いた所で、まず口を開いたのは鳥本だった。

「とりあえず、だ。お前の素性を聞きたい。名前は？ 肩書きは？  
そもそも、この世界の人間か？」

喫茶店アナザー、ここは名前通り「異世界の人間」が頻繁に現れる場所でもある。鳥本が懸念するのは「異世界の人間」である可能性であり、もしそうだとするのなら少し厄介な事になるかもしれない。

しかし和服女は、至極真面目な顔を傾けて唸った。

「んー……コノセカイって何だか知らないから、それは明言できないツス。肩書きは何だろ……あ、刀持ってるんですよ刀！ だから武士！ 名前は……えーと、どうしよう。武士子でいいや」

いきなり袖口から小刀を取り出し、ブンブン振り回す和服女。鞘に仕舞ってあるとはいえ危ない というより、あまりにもツッコミ所の多い自己紹介だった。

さっきの和服女と同じように首を傾げながら、しかし口元を苦笑いの形にして鳥本は問う。

「あー……つまり何なんだ？ 自分の状況を一言で説明してくれ」

男らしい顔に眩しいばかりの笑みを浮かべ、ピースサイン付きで、女は威勢よく声を張り上げた。

「記憶喪失！」

\*\*\*

四葉<sup>よつば</sup> 緑はメイド長である。その優秀な能力により鳥本邸を裏で支え、腹黒さにより裏で操る最強のメイドさんである。

「また増えるんですか……」

そのメイドさんが、少々疲れた顔で目の前の光景を 主である

鳥本が和服の女を引っ張っている光景を見つめている。

鳥本は和服女に襟首をつかみながら答える。

「こうするのが最善なんだ…… かくかくしかじかでな」

「なるほど…… かくかくしかじかなら仕方ないですね」

コメディ補正により、端的に伝わる二人であつた。

「ねーねー、『増える』ってどういう事ツスか、旦那あ？」

掴まれたまま、和服女は鳥本に質問をする。

「旦那って俺の事が…… いや、言っただろう、とりあえずお前を居候にする。ここにはもう居候が何十万と居るしな」

「へー、二世帯住宅って奴ですね、旦那」

ツッコむのも疲れるので流す鳥本。元々ツッコミ専門じゃないのだ付き合っていられないのだ。そんなこんなでとりあえず和服女を

解放すると、一目散に緑の前へと走っていった。

「はじめまして、私は武士子ッス！」

名前はそれで確定なのか、とポツリとツツコむ鳥本だった。  
その挨拶を受けた緑は、作法に則った綺麗な礼をして答える。

「初めまして、武士子様。私は山上家のメイド長の四葉 緑です」

「メイドー？ 地獄の番人とかそういう系の役柄の人ー？」

「基本的なネタですね」

前にもこんな事あったなーと思いながら二人の様子を見ている鳥本。和服女改め武士子は明るいいし最低限の挨拶も出来るようだし、馴染めない事もないだろう。

とりあえず居候させたとしても大丈夫そうだと判断しながら二人に背を向ける。

「緑、空いている部屋に案内してやってくれ」

「はい、分かりました……って、鳥本様はどちらへ？」

首を傾げる緑を振り返りもせず、鳥本は歩き続ける。疲れたように、考え込むように眉間にしわを刻みながら。

「少し調べ物だ」

\*\*\*



「う、うつうう……酷い酷い酷いッス誘っておいで放置するなんてグレますグレてやります」

「まあまあ」

数分後の廊下には、涙目になっている武士子の頭を撫でて慰めている緑の姿があつた。それでも実は後ろから押して強制的に歩かせている辺り、それなりに容赦がない。

これからどうしようか、緑は考える。空いている部屋とだけ言つたからには自分に任せるんだろうけど、それにしたってまずは何人かに紹介しないと生活はままならない。この子の面倒を上手く見てあげられそうな居候は……

と、そこまで考えた所で、大地を揺らすような強烈な音が響いた。

「……てへ」

さっきまで泣いていたのに、今度は照れたように頬を染める武士子。さっきのはお腹の音である。

「お腹空いたんですか？」

喫茶店で食べてきたと鳥本に聞いている緑は呆れ顔だ。それでも頭をかきながら「少し……」と愛想笑いしているのだから、冗談と言つわけではないだろう。冗談でお腹は鳴らせないのだし。

仕方ないですね、と溜め息をつきたまたま近くにあつた食堂を指す。

「そういえば、記憶喪失だと聞きましたが……」

「ん、そーなんツスよ。なーんにも思い出せないで困つてて」

肩を竦める武士子。コロコロと表情が変わるな、という感想を抱きながらも観察を続ける。まずは肌の色、白人かもしれないがほぼ間違いなく黄色人種。服装も合わせて考えて、異世界だとしても「日本的な世界」だろうと思う。

言葉遣いは妙だが、妙で居られると言う事はあまりそういう事に制限のない暮らしだったんだろう。小刀を持ち歩いていると言う事は護身用に持ち歩くような環境に居たからだろうか、それとも趣味や骨董の類だろうか。

考えても分からない、やっぱり情報が不足している。あれこれ考えている内に食堂に着いてしまった。

「うおー！ 良い匂いっす、画龍点睛！」

「その四文字熟語は何の関係もありませんけど……」

物珍しそうに首を巡らせる武士子。

「新しいお客様です、料理大臣！」「今日は料理仙人じゃと言っておるであろつが」

調理場で珍妙なやり取りが繰り広げられているが、武士子はそっちよりも料理の匂いが気になるようだ。目を閉じて鼻をひくつかせている、意地汚さ全開である。

そして匂いを察知したのか、いきなり走り出す武士子。慌てて袖を掴もうとするが、すぐに振り払われ 慣れた動作だ、やはりあまり良い環境じゃなかった？ 一直線にそのテーブルを目指す。本当に一直線だ、椅子やテーブルの上を猿みたいに跳ね回っている。なんていうかもう、動物にしか見えなくなってきた緑である。

その目的地 目の前の皿に手をつけ始めていた二人は、それぞ

れ違う反応をした。かたや驚きに目を見開き、かたや落ち着きながら右手でパスタを食べ、左手で何かの機械を操作する。

すると、なんかもう女の子というか人間に見えない表情で料理を奪おうとしていた武士子の顔に、拳がめり込んだ。まだ二メートルも離れているのに　という疑問は、初めから二人の正体を知っている緑にはありえなかった。

「ロケットパンチ推進力アップバージョン、成功ー」

「頼むから私の知らない間に改造しないでくれ……」

コントのようにスローモーションで倒れる武士子。鼻血が流れて白目を剥いていて、もう目を背けて上げたくなる無様さだった。

「ああもう、問題はすっかり起こして……」

武士子になのか居候全体にかそれとも両方が、本人にしか分からない愚痴を零してそちらに近づいていく緑。食事を取っていた二人も、緑に気づいて挨拶をする。

「あ、緑さんだ、やほー」「どうも、緑さん……ところでコイツはなんだ？」

金髪ツインテールの女の子と、その隣の女の子。その二人組に頭を下げながら、皿のパスタを一本拝借する。そのまま武士子の口に運ぶと、ずるずる吸い込みながら意識を取り戻した。扱いが動物以下である。

「ん……あれー？　私はいつー？　ここはだれー？　今はどこー？」

「一個付け足してもベタな事は変わりませんよ。ほら、立ち上がって挨拶しましょう」

頭を振って唸る武士子の鼻血を拭いてあげながら（ハンカチ常備はメイドの嗜み）、背中を叩いてちゃんと立たせてあげる。しばらくふらふらしていたが、ようやく目の前に人がいることに気付いたのか、きつちりと頭を下げた。

「初めまして！ 自分、新しい居候の武士子っス！」

「はじめましてー。私は洞崎<sup>とうづき</sup> 美緒<sup>みお</sup>。よろしくー」

金髪ツインテール 美緒は普通に挨拶を交わしているが、もう一人はピンク色のカバでも見ているような目で武士子を観察する。初っ端からあれだから仕方ないけど。

「あっちは虹広<sup>にじひろ</sup> 真遊<sup>まゆ</sup>ね」

黙っている内に美緒に紹介されて、もう一人 真遊は不機嫌そうに顔をしかめた。「こんなのと関わりたくない」オーラが出ていた。でも武士子は気にせず「よろしくっすー」と声をかける。無視されるけど。

「……む、無視されたあ！？」

「だいじょーぶだいじょーぶ。真遊はシャイなだけだから」

「お、おお！ つまり初対面の私と話すのが嬉し恥ずかしっすね！」

絶対にツッコむものか、と腕を組んで耐える真遊。その間にもあ

る事ない事言われるが、食事を見かけると凶暴化するような女とお近づきになるよりはマシである。

「でねでねー……釣られないか、なら今度他人に対する好感度を弄って「嫌だああああ！」

いきなり黒くなった美緒の言葉を思わず遮ってしまう真遊。ニヤニヤ笑っている実緒と緑を見て、畏だったと気づかされる。ちなみに武士子はポカーンとしていた。

「やだなー、私は真遊にそんな酷い事しないよー？」

「ど、どの口が……」

反論したいが言葉が見つからず、口をパクパクさせるだけ。その内に武士子に捕まり、何かもうなし崩しに挨拶することになってしまった。

適当に挨拶を済ませ、そのままの流れで武士子は二人の前に座って注文の品を待つことにした。そして食った。貪り食った。目の前の二人の食事を合わせた、さらに二倍は食べている。

「よく食べるな……」

「食べないと生き残れないッスから！」

真遊の呟きにハンバーグを咀嚼しながら答え　その言葉に自分自身首を捻る。

「あれえ？ 『生き残れない』？ 私、野生なんですかねえ？」

「確かに森の中に居ても違和感はないが……」

きちんと服を着て道具も使えるのに、野生味溢れる武士子だった。白米にがつつきながら会話する武士子に嫌気が差した真遊は、隣にヘルプを求める。

緑は苦笑するだけだったが、美緒は真遊の背に飛び乗って会話に割り込んだ。多分体勢に意味は無い。

「武士子、ちょっと食べるのやめてこっち向いてー？」

美緒の声が響くが、武士子は無言の拒否　　というか、食事に集中しすぎて聞こえていない。ムツとした美緒は再び手元で機械を操作する。

「ロケットパンチ！」「だから勝手に飛ばすなあ！」

真遊の右手が飛んだ。しかし今度は武士子も黙っていない、キュピーンって感じで目が光って臨戦態勢に入る。

落ちた箸が皿に当たり、涼やかな音が響き渡る。その時には既に真遊の手が席に到達していたが、そこに武士子の姿は無い。足の力のみを使い、高く飛びあがったのだ。ロケットパンチは遠隔操作でほぼ直角に追いかける、空中では回避できない。だが発想の転換、武士子はロケットパンチ自体を足場にし、さらに高く舞い上がった。そして

「いい加減にしなさい」

緑に止められた。それぞれ手首と足首を掴まれて。真遊が疲れたように溜め息を漏らす。

「あ、あうう。でも先に仕掛けてきたのは美緒ちゃんじゃあ……」  
「武士子が言う事聞かないから……」

「お黙りなさい、まったく無駄な描写して……」

描写とか言っちゃうけど気にはいけないのである。

それぞれロケットパンチをきちんと戻し、椅子に座りなおし、食事を再開する。

「武士子、ちょっと食べるのやめてこっち向いてー？」

「はぐはぐがつがつむしゃむしゃ」

「待つて美緒、話が先に進まないから」

ボタンに指を伸ばしかけた美緒を真遊が止める。そしてその間に緑が武士子の視線をそちらに移した、肉でひらひら誘って。蝶々追っかけてる子供みたいな素敵シーンだが、対象が肉だとただ意地汚いだけだ。

そんな武士子の襟元に、真遊の背から体を乗り出した美緒が手の平を押し付けた。

「うひあ私の胸があ！ セクハラッ！？」

「いや、どっちかと言うと首筋だろ……」

「首マニア！？」

もうツッコミたくなって黙ってしまふ真遊。ツッコミ寄りの彼女でもこれの相手は厳しいらしい。

真遊の体からテーブルをまたぐという無茶な体勢をしていた美緒が床に下り立つ。そのままあらぬ方（カメラ目線）を向いて口を開いた。

「説明しよう！ 今貼り付けたのは超小型化された『発信機』！これで迷子になっても安心だぞ！」

「疲れてるんだからもうツツコまさせないでくれ……」

真遊がツツコミ出来ない状態で、しかも緑は傍観。この場に妙な流れを止められる者は誰一人として居なかった。

「おお！ これさえあれば一人でうるついても大丈夫ッスね！」

「うん。変なところ行きそうになったり迷子になったりしたら、緑さんが来てくれるよー」

「便利ッス感涙ッスー！」

\*\*\*

電気もつけず、その部屋では一人の男が通話していた。

「……そうか、ではやはり」

『うん……少なくとも僕は見てない』

アナザーに勤める友人、氷火への確認を終えて電話を切る。そこで鳥本は溜め息をついた。

武士子がこちらに来たのはアナザーのせいじゃない      それがほ



ば確定した、氷火ならあんな目立つ奴を見逃すわけは無いだろう。やはり、少し厄介かもしれない。

他の世界との繋がり方次第では対策も考えなければならない、と思案していると、控えめなノックの音が耳に届く。

「入れ」

返す言葉が届くが早いか、扉が開いて現れたのは緑。一礼して、鳥本の目の前まで音もなく歩く。

「仰られたとおり、美緒様の発信機を武士子様に付けました。本人は喜んでいましたが……やはり、警戒しておられるのですか？」

「ああ……とは言っても、アイツよりは世界の問題だな」

武士子単体なら何も問題は無い。あの程度の事情ならば、ここまではむしろ一般的過ぎるくらいだ。ただ、心配しているのは世界同士の繋がり。

リザルトキング  
真の王。

世界によつては警戒しなければいけないかもしれないが、何せ武士子自身が記憶喪失なので元の世界が分からないし、もし武士子によつて何らかの事情が漏れていれば厄介なことになるかも知れない。

「とりあえず、あいつ本人についても警戒だけはしておくか。おい、魔法王」

「魔法王様を呼ぶのですか？」

「そつだ、魔法王が一番適任だろうしな」

廊下から慌しい足音が響いてくる。しかし二人は慌てもせず、落ち着いてその人物の到着を待っていた。

そのままの勢いで扉が開かれ、一人の男が現れた。

「僕のツ！ 名前はツ！ アークだああああ！」

「ん？ ああ、お前はアークだな。どうした、そんなに急いで？」

息を切らして叫ぶ男      アークの顔を見て、鳥本は白々しく首を傾げた。

「鳥本さん……い、今誰か魔法王と言いませんでしたか？」

「いや、俺は聞いていないぞ。なあ、緑？」

「ええ、まったくこれっぽちも聞こえておりませんよ？」

二人をジト目で睨むアークだが、この二人に対する言葉が見つからない。一番口が達者なコンビでもあるわけだし。

溜め息をついてたった今入ってきた扉から出て行こうとするアークだが、それを鳥本が呼び止める。

「いきなり飛び込んできてくれたのはとても奇遇でな、ちょっと頼みたい事がある……桜やフロア達の近くに居てやってくれ。そしてその時は少し警戒をしておけ」

「……え、ええ。でも何で僕が？」

「お前が一番自然だというだけだよ、戦えない奴等を居るにはな」

あくまで自然な態度の鳥本だが、それに対してアークの表情は探るような、何かに悩むような、複雑なものだった。

山上鳥本、異世界から跳ばされてきた自分たちと快く受け入れてくれた人物だが、なにかと謎が多い。フロアと自分の事情を話す程度ほどには信頼出来るが、それはあくまで鳥本自身の人柄についてだ。鳥本の裏にある事情などは　そういうものがあるのかも含めて　まったく分かっていない。そもそもこの自分たちが寝起きしている場所自体凄まじい、様々な人間や人間以外が共存している環境。

「今日も、飛びきり強烈な人を受け入れたみたいだしなあ……」

「ん？　アークお前、もうあいつに会ったのか？」

ええまあ、と頭痛を抑えるような仕草をして頷く。

「図書館に行こうとしている時にいきなり現れまして……なんか人引きずってたし。本当、鳥本さんは器が広い……」

皮肉なのか本心なのか、溜め息を吐くアークに緑が苦笑した。

「まあ、警戒しろと言われればしますよ、フロアになにかあるのは僕としても嫌ですしね」

そして今度こそアークは扉をくぐる。フロアが桜を探しに行くのだろう。

再び二人きりになった所で、緑の声が悪戯っぽく響いた。

「鳥本様は、空香様を守って差し上げればよろしいのでは？」

「……よく分からないこと言っていないで、お前もさっさと通常業務に戻れ」

はいはい、とどこか面白そうな声と共に緑も部屋から消える。残ったのは部屋の主ただ一人。

鳥本は一人、これからの問題について考えをめぐらせていた。

\*\*\*

どうしてこうなったんだろう。

武士子は考える。

私はただ、言われたとおりに屋敷中を回っていただけだ。悪い事は……何故か畏にかかっていた男の人を引きずり出して引っ張りまわすぐらいしかやっていない。面白そうだったからついやってしまったが、皆さんの視線が「またやられてるのかー」みたいな感じだったからいつもの事なのだろう、南無。

その後は図書館に行く途中で男の人に挨拶して、到着してからは面白いお爺さんとお話して、これからの生活順風満帆って気分だった筈だ。

転機としてはそこだったのだろう。そのお爺さんの孫娘だという人に挨拶していると、その友達らしき二人とも出会ったのだ。当然挨拶をした。三人とも自分より少し年下ぐらいだろうけど、仲良くなれそうな気がした。

逃げるべきだったのはここだったのだろう。その三人は、私の身なりについて触れてきた。自分ではそれほど気にならなかったんだけど、どうも服はいいくせに髪が乱れてるだとか肌が荒れてるだとか何とか。

そこで武士子は思考停止する。

「iiiiiiiiいやああああ!」

そして叫んだ。

「……逃げちゃ、駄目」

「女の子だからねー」

「これぐらいはねー」

三人の女性　桜、空香、フロアが、尻餅をついて後ずさる武士子を包囲する。そしてじりじりとその包囲を縮めていく。武士子の顔に浮かぶのは、紛れもない恐怖。

三人がもう一步踏み込もうとしたその時

「凄い声だったけど……あ、ここに居たのか」

扉が開き、アークが部屋の中に踏み込んできた。

「あ、魔法王！　今は女の子だけで集まってるんだからね」

「だから僕の名前は魔法王では無いとあれほど……ん？　なんだ、さっきの声は君だったのか？」

フロアとの恒例のやり取りの後、ちらりと部屋の隅を見遣る。縮こまっている武士子が居る地点だ。

「う、うう……さっき会ったおにーさん！　助けてえー！」

武士子はいええ、端に追い詰められている以外に変わったところはない……筈だ。アーク自身、彼女の姿をよく見たわけでは無い

から変化があっても気づけて居ないだけかも知れないが。

「……何で、あの人と知り合い……？」

「ひあああああ！？ さ、桜ちゃん超絶怖いツスよ！？」

桜が『何故か』武士子を睨んでいる光景を見て、今まで気付かなかったアークもつい声を漏らして納得した。頭を抱えたからよく見えたのだが、後ろで髪を縛っている。

よく見ればフロアは乳液の容器のようなものを握っているし、空香も口紅を数本持っていた。さらに言うなら武士子の前髪が上げられてる、どうやら後ろで縛っているのはこれの為らしい。

どう考えても化粧だ。やっぱりなんでこういう状況なのか分からないが。

「ま、まあ状況は分からないけど……嫌がってるんならやめてあげた方が……」

アークのおずおずとした制止に、三人は渋々といった顔で手を止める。

「……この人が、あんまりにも自分の容姿気にしてないから」

「だからと言って、私はそういうの駄目なんですよお！ 鼻が利かなくなるツス！」

動物か、と言おうと思ったが女性の中に一人というアウェイ状態なので口を慎む事にするアーク。賢明である。

だが確かに、身だしなみ以前に体のほうが少し問題があるかも知れない。痩せぎすというわけではなくむしろ筋肉はありそうなのだ

が、どうにも顔色も悪い気がする。不摂生、栄養不足、そんな感じだ。

「そういうの、興味ないツスから！」

と、アークが観察している内に話が付いたようだ。女性陣はそれぞれ手に持った物を元の場所に戻している。安堵の溜め息が、武士子とアークの両方から漏れた。

武士子が立ち上がって尻を払う様子を見届け、アークはフロアの方に向かう。

「ふう……助かったツス……」

立ち上がってそのまま扉に向かおうとした武士子だが、ふと空香に話しかけられているのに気付いた。

「ねえ、何でそんなに化粧したくないの？」

それはある意味、自然な疑問なのかもしれない。確かに女性は化粧をする物だ、それがステータスになる。

ああ、だからこそ。

だからこそ、それは、自分が身に着けては

「……大体、貴女もしてないじゃないツスカ」

「まあ、それはそうだけど……勧められて断る理由も無いし」

それは、ご大層な身分だ。

ああ、憎い。

私は、私達は、生きるために

「……武士子」

「うひゃ！？ ひゃい！」

急に掛けられた声に飛び上がる武士子。声の主である桜としては驚かせるつもりはなかったのだが、元々が物静かだから、先ほどの武士子ならば気付かなくても仕方ない。

そう、先ほどの自分は何がおかしかった、でも何がおかしいのか分からない。武士子は自分の心を覗き込むように探るが、何の感情の片鱗も感じられなかった。

「……その髪で出歩く気？」

言われて髪に触れてみると、化粧の時に縛った後ろ髪を解いていない事に気付いた。慌ててゴム紐に両手を向かわせるが、こんな作業は初めての経験だった。上手くいかず、手間取ってしまう。

「……そこに座って」

「う……了解ッス」

慣れているのか、手際良く進めて行く桜。ゴム紐を解き、髪を整えて

「ありがと……おおう？」

そしてまた束ねて、再びゴム紐を通す。礼を言って立ち上がりかけていた武士子は、驚いて再び腰を下ろした。

「な、何するんスかあ！」



これでは意味が無い、結局同じように戻ただけじゃないか。  
だがそれにもかかわらず、空香は自分の顔を眺めるようにしている。遠くではフロアとアークも同様の動きをしているだろう。武士子は自分の状況が分からずに困惑していると、桜が手鏡を手渡してきた。

そこに映っていたのは紛れも無く自分の顔だが、印象が大きく異なっていた。今までは長すぎる髪が目線に少しかかっていたが、それがすっきりしている。自分の顔はこういう顔だったのか、と再確認させられた気分だ。

桜とお揃いの髪型　ポニーテールだ。化粧をしない最低限のお洒落と言うことだろうか、照れ臭さと嬉しさが入り混じった、妙な気持ちになった。

「……ありがとうッス」

顔を伏せていても、優しい気配が伝わってくる。ここは良い所だと思った、誰かが誰かに優しく出来る世界だと思った。

でも、だから。

自分は、こんな所に居るべきじゃなくて。

「うん、そっちの方が似合ってる」

社交辞令であるアークの言葉に、部屋のどこから殺気が噴出する。誰かが誰かに恋をして、誰かが誰かを好きになって。

ああ、そんなの。

自分には、どうやっても望むべきじゃない。

「う、あ……？」

自分はなんだったんだろう。その答えが今なら見つかりそうな気がした。見つけてはいけない気がした。見つけなければいけない気がした。見つけるしかないようだった。

血、だ。誰かを、殺したんだ。ああでも、誰を殺したんだ。何を殺したんだ？

「うあ、あ……？」

そうだ、そうだ。思い出そう。だって、殺さなければいけないのだから。憎いんだ、だから自動的にこの体は動いてくれるんだ。そうに決まっているんだ。

頭の中がくるくる回る。心の中が鬱々巡る。  
そんな中、扉が開かれた。

「なぐんか騒がし〜」

虹のように色が移り変わる髪の子、それが最後の引き金だった。

ああ、思い出した。私が殺したのは『ソレ』なんだ。

頭の中で、歯車がかみ合う感触がした。過去の自分と今の自分が手を繋ぐ、ああ吐き気がする。何を平和に馴染んでいるんだ。

私は獣、道化者。頑張つて、結局何も手に入らなかった道化者。何も手に入らなかったからこそ、手元に残った物がある。さあ、殺そう。殺して回ろう。だって、だってだって

「金持ちは、嫌いだ」

とても慣れた動作で、袖から掌へすとんと小刀が滑り落ちる。さあ、殺戮だ。私が獣である<sup>わたし</sup>ために。

\*\*\*

原初風景は死体だった。

誰かが殺したのだろう、自分は死体の持ち物だったポーチを漁り、金目の物が無いか探し続けていた。

どうしてこんな場所に居るのかも分からない。ただこういう事をしなければこんな場所にすら居られないのが分かっていた。

結局、ポーチは既に漁られた後だった。何も無いよりマシかと判断し、質屋に入れるためにポーチを持ち上げる。

「あれ、ガキが居んじゃない？」

その時だった、声が聞こえたのは。罵声でも悲鳴でもない声を聞いたのは久しぶりで、それだけで体中が溶けそうなほどの安心が身を包む。

鬱陶しい髪を払って見上げると、どうやら女性であるようだ。ここに居る大半の人間と違い、体のほとんどを覆うことが出来る服を着ているので、確信が持てないが。

「よっす、ここは酷い町だな。魔法発動に民が犠牲になるなんてありがちだけど、いやはや露骨なもんやねえ」

「あー……」

「お、喋れやんの？ 見たトコ五歳ぐらいやけど……あー、やっぱり教育って大事なんやねえ」

女性はケラケラ笑い、死体を蹴っ飛ばした。ごろりごろりと液体を撒き散らし、ごろりごろりと小さい物と大きい物が。シニールにすら見える、愉快に不快なその光景。

「お前、私の娘になる？ ていうかなれ。こんな臭くて汚い殺し方  
見てると、なんや腹立つわ」

「うー……」

訳が分からずに女性に抱きかかえられる。一つ分かったのは、目の前のこれをしたのは自分だって事。ああそうだ、ちょっと重いものをぶつければ、こんな大きいのも簡単に死んでくれる。

「あー……」

とりあえずありがとう、さようなら、私の初めての人。ひがしつや

\*\*\*

それは突然の事だった。それに対応したアークの動きは褒められるべきものだろう。

武士子の手が、一番近くに居た桜の手首を掴む。いきなり現れたゲーム神に気をとられていたので誰もその光景に注目していない。そのまま桜が振り向くと、天高く振り上げられた刃が目に入った。

「ひっ！」

喉が痙攣するような瞬間の悲鳴、その声が終わるかどうかという時に刃が落下を始める。その単純かつ手早い殺害を食い止めたのがアークだった。いつの間にか近づいていた彼が、逆の手首を取ってほぼ抱き込むようにして引き寄せたのだ。

「……一体、何の真似だ？」

問い掛ける声、一拍遅れて上がる悲鳴。女性を後ろに下がらせながら、アークは構えを取った。拳で殴る構えではなく、どこから斬りかかれても回避するための体勢。魔法王と異名通りの彼の力からすれば、この間合いは不利と言わざるを得ない。

武士子が顔をあげた。前髪が目を覆い隠していない事が逆に恐怖を引き立てる、その瞳はただ目標に向かうひたむきだけが籠められていたのだから。狂気ではなく、錯乱ではなく、虚無ではなく、ただそこに目標があるから向かうというむしろ前向きな思い。本能的に、寒気がした。

「何の真似って、殺しの真似じゃないですか」

ふつ、と。空気を巻き上げるような音が聞こえたような気がした。次の瞬間、武士子の体はアークの目の前にあった。刃が十分に届く攻撃範囲内、ありえないほどの移動速度 ではない。走れば詰められる間合いだが、その過程を認識できなかっただけ。

「まあ、真似で済めばいいツスけど」

「くっ……ウインド・ボーム！」

掌に生み出した風の爆弾を、身をよじりながら強引に当てていく。だが武士子は再び視界から消えていた、魔法は虚しく空を切る。

いや、今度は見えた。ただ、恐ろしい速度で屈んだだけ。人間の体とは思えぬバネと関節を駆使し、通常ではありえない軌道で移動・回避を実行している。

視線を下に向けると、確かにそこに武士子が居た。逆立ちのように両手を地面につけて、そして体を丸めている。

「曲芸・飛鳥落」  
とびうりをおとす

次の瞬間、丸めた体が足を基点に競り上がる。打ち出された銃弾のように、足裏は的確にアークの顎を捉えた。脳が揺れる、体が仰け反る。

このままではいけない、と目を開いた時には既に眼前に武士子の姿は無い。目に映る物は、彼女の足先と小刀の鞘。そんなものに疑問を抱いている場合では無い。どれほどの跳躍力なのか、おそらく後ろ上空に居るであろう武士子に向き直ろうとするが、それは叶わなかった。

「曲芸・地揺」  
ちがゆれる

気づいた時には遅かった。

鞘のそれぞれの端を両つま先が引つ掛け、それは彼女の下半身と合わせて四角形を形作る。そしてほぼ正方を描いていたそれは長方形へ、アークの首を絞める形となる。

そして頭を尻で押しつぶされながら落下。上下の衝撃と、喉への深刻的なダメージ。魔法で防御していたからまだ良かったものの、下手をしたら死んでいたかもしれない。

否、おそらく確実に、死なないにしても致命傷だっただろう。これは、人を殺すための技だ。

「……おかしいッスね。どう受け身とつても頭蓋が胸骨がヤツてるはずッスけど……んー？ まさか反応できずに首折られたとか間抜けなんじゃないッスよねー？ 女の子に顔向け出来ませんよ？」

げしげしと頭を蹴られているのが分かるが、その感覚すら鈍い。立ち上がろうとすれば立ち上がれるかもしれないが、そうしたところでまともに戦うことは出来ないだろう。第一、この距離では立ち

上がる事すら許されそうにない。

「おにいさんは優しかったので見逃します、というか皆殺し出来るほど体もぢませんし。……じゃ」

立ち去っていく足音、だが動けない。動けば確実にこちらを狙う、今の状態では迎撃出来ない。

どうしようもなく、その足音を聞いていた。

\*\*\*

「おかーさん」

森の中、自分の声は驚くほど響く。澄んだ空気の中、他に聞こえるのは鳥の鳴き声や自分の足音だけ。

「んあ、どーした？ お腹空いたん？」

頷いて返す、この頃の自分では単語文が精一杯だった。

「んー、まあせっかくの訓練なんやし、自分でなんとかとってき。火は通してあげるさかい」

頷いて返す、『母』の言う事は絶対だった。彼女に従ってさえいれば幸せな生活を送れるのだから。

だって服を着る方法を教えてくれる。外に行けば『食べ物』がたくさん歩いていると教えてくれる。そして誰にも負けないための力を教えてくれる。

既に手に馴染んだナイフを握り締めた。森の獣は縦横無尽に動き回るが、それもまた訓練だ。彼らに追いつき、屈服させるだけの力

が必要だった。逆に言えば、それさえあれば良かった。

私の住む世界は、私が捨てられた世界はそういう場所だ。

「あんまり遠く行くなや。まだ死んだらあかんで」

頷いて返す、そして森の中へと走り出す。

\*\*\*

ゆらゆらと、視界が揺れている気がした。それは多分、涙だった。知らなかった。顔を知っている人間を痛めつけるのがあそこまで嫌なことだなんて、知らなかった。

ああ気持ち悪い。他人の親切を踏みにじって、あまつさえ恩人を殺そうと思っている自分が。

ああ気持ち悪い。今までの事を全部忘れて、平気で普通に暮らそうと思っていた自分が。

「よお」

ふと、声が聞こえた。広い廊下に反響して、どこから聞こえたのかも判然としない。

自分が廊下にいる事すら今気付いた。いけない、思考を切り替えなければ。

「誰ツスか？ どこツスか？」

心を冷やしながら問う。両手には既に抜き身の小刀をそれぞれ握っている。

「上だよ、上」



そう言っておきながら別方向から襲い掛かれる、という経験は何度もしてきた。周りに警戒しつつも、少しずつ目線を挙げていく。そしてそれが目に入った時、不覚にも警戒が解けてしまった。もしそれが罠だったならこれ以上なく効果的だっただろう。

なんか、天上から逆さ吊りにされている男がいた。

「……こ、今期最大のミステリー！」

「いや、お前があの人三人追っかけるからだよ！ 突き飛ばされてたまたま罠に掛かって、『まあ創輝だからいつか』みたいな対応されただぞ畜生！」

何でたまたま罠に掛かるんだろう、何で殺人鬼に追われてるのに「まあいつか」なんだろう、疑問は尽きないが男の正体は思い出した。図書館への道すがら引っ張りまわした（物理的に）男だ。

「で、何なんだ？ お前、いきなり暴れたみたいだけど」

「どうも何も、私は殺すだけツスよ。そうしたいと思うんですから」

ふうん、と興味なさそうに青年が呟き　その瞬間、雰囲気が変わる。殺気でも敵意でもなく、ただ場数を踏んだ人間の持つ雰囲気。両手両足が使えない人間のものとは思えない威圧感。

またか、と思う。先ほどの戦闘でも不可解な力が使われた、今回もそれと同じような力が使えるんだろう。

武士子の常識の中で、『魔法』というのはやたら面倒臭いものだ。手間隙掛けた準備と、少しでもズレてはいけない配置が揃って初めて効果を発揮する。あれは、武士子の知る現象ではない。

「まあ、通るなら好きにしろよ。今ならどうにも出来ないしな」

「よく言うツスよ……」

素通りする事もできたが、何をしてくるのかも分からないものを背後に残しておくのも気持ちが悪い。

大丈夫、相手は動けない、一瞬で終わる、自分に言い聞かせて刃を相手に向けた。

「なあ、お前、楽しかったか？」

不意に、先ほどより少しだけ優しい声が響いてきた。

その問は、今の自分にはとても辛い。確かに楽しかった、でもそれ以上に今までの自分が否定されているようで嫌だった。胃がぐるぐる回る、いつそあんな豪勢な食事なんて吐き出してしまおうか。

「その顔見てりゃ、まあなんとなく分かるよ。……スゲーだろ、これが山上鳥本だ」

山上鳥本。彼が作った一つの世界。<sup>はいいわ</sup>この世界は、彼女が知る世界よりも穏やかで、楽しくて。だからこそ、怖くて。

また視界が揺れる、せつかく拭ったのにまた涙だ。今までの人生であまり泣かなかったツケとばかりに、嫌というほど湧いてくる。

「うるさいツスよ……さつさと、殺させて下さい」

涙をまた拭う、このままじゃ袖を絞れるほどになりそうだななんて思ってしまう。幸せになるかもしれない未来なんて思いたくない、もう刃を向けてしまったんだ。

今度こそもう何も聞かない覚悟を決めて、再び刃を向けた。しか

し切っ先を向けた相手は不敵に笑みを浮かべている、さっきからの臨戦態勢ではなく本当に余裕めいた笑みを。

「あー……残念だけど、時間切れだ。そりゃそうか、ここまで派手に騒いで、あいつが来ないわけないよな」

不可解な言葉に武士子が首を傾げた途端　派手な音を立てて窓が割れた。体を両腕で守りながら杵を蹴り飛ばして廊下へと突入するそれは、女性だった。おそらく桜たち三人とそう変わらない歳だろう。片手に刀を持ち、立ち上がったその姿は威風堂々という言葉がよく似合う。

「強い気配はお前か……私と勝負しろ！」

「……はは、まだまだ面白い人が居るもんスね、ここは」

そして二人は構え、向かい合う。

「どうでもいいけど、そろそろ誰か下ろしてくれないかなあ……」

そして男は、まだまだ逆さ吊り。

\*\*\*

「くあー！　負けた！　免許皆伝やる、チクショー！」

その日、初めて母を倒した。良い食事と適度な運動、若い頃からの体作りをしている母とは体力面で既に劣っているが、もちろん技術でも敵わなかった。それを今、私は越えたのだ。

「おお……初めて勝ったツス」

「うんうん、ちゃんと言葉も話せるようになったし、剣も私より上やし、もう言う事は無いな」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられ、ふらつく。正直、もう立っているのも辛い。早く眠りたい。

母と私の関係は良好だった。ここ　首都の外周部のスラム街では、生きる知恵を教える代わりに物を貢ぐ「子供」がほとんどだが、自分はそんな事もなく日々を送っていた。内周部に生きる人間がいう「愛情」というものは分らないが、少なくとも「連帯感」のよくなものは芽生えていた。

母はこの国のどこかにある何かの店に召し抱えられた用心棒らしい。剣術だけで生き抜く部族の生まれで、そこでの生活が嫌になつてこの国へ逃げてきたという事だ。自分が習った剣術はその部族の物で、使う人間を選ぶがかなり強い、らしい。

「くあー！　やっぱ才能あるわお前。お前みたいなのを切り捨てるさかい、私はこの国の魔法が気に食わん」

「でも、仕方ないツスよ。私はたまたま母が欲しかった才能があるだけです」

魔法は難しい、らしい。母に聞いた話だが、この国の魔法は「国民の名前」を使って王を守る魔法を成立させているらしい。子供が生まれれば政府から通達された名前を付け、予定の人数まで子供が揃わなければ他の地域や国から養子をとる。

自分たちスラム街の人間はその逆だ。予定には無い子供　無計画な出産　夫婦の愛情だか浮気だか無理矢理だか知らないが、期せずして増えてしまった要らないもう一人。ここにいるのは大半が

そついう子供。名前すらもらえず捨てられた子供。

言葉を覚える過程で母に借りた本には「名前こそが親が子に与える初めての贈り物」と書いてあった。ならば自分が這い出てきたそれは、親では無いのだろう。

そんな風にずっと思っていた。関係のない他人だとは思っていなかった。特に關心もなく、生き抜く事だけを考えていたつもりだった。

「なあ、本当の親に会いたいかな？」

私は多分、スラム街の中でもおかしい人間だっただろうけど。本当に壊れたのは多分、これが原因だ。

\*\*\*

たんたんたん、地面を叩く裸足の音。先ほどもでは草履を履いていたが、やはり素足の方が落ち着く。直接伝わる衝撃が体にしつくり染み渡る。

しかし油断してばかりも居られない。自分と並走する少女がこちらの隙をうかがっている。

先手必勝、減速を挟まずに右足で急制動。そして左手で右袖に入れたあつた鞘を取り出し、横面を叩くように殴りつけた。急な動きにも関わらず、それは刀の柄で防がれる。だが、予想通り。

「曲芸」

既に手首からは上に力は入っていない。鞘をそのまま手からわざと零し。敵からすればすり抜けられたような奇妙な感覚だろう。そのままくると一回転する勢いで鞘で狙ったのと同じ打点、柄を蹴り付ける。そのままよろめいた相手の、次は手首を狙い。袖

から引き抜いた小刀を振り抜いた。

「あまたれいしをつがつ  
雨石穿」

このまま腕を切り裂いて武器を落とせば良し　と考えていたが、あれだけ揺さぶったにもかかわらずきちんと刀身を合わせてきた。金属の打ち合う音、その後擦り合せるような音を立て、小刀は下へ流される。

強い、戦い慣れている。後遺症を残すほどの怪我を負いかねない攻防の後だというのに、その表情はむしろ充足に満ちていた。根っからの戦闘狂　斬るのが好きな快樂殺人者ではなく、このやり取りの空気を好む者。

「ふん、中々の手練と見える」

戦わないと死にますからね、と心の中だけで答え、相手の出方を見る。迂闊に動いてはこちらがやられるだろう。

すぐさま攻撃に移るかと思っていたが、意外にも相手はすこし刀を引いた。

「私は天信　梨恵だ。お前の名を聞いておこう」

名前。それは少し、残酷な言葉だ。

武士子、と口が動きかけたがそれを名乗る気はない、名乗ってはいけない。次に思いついたのは『本当の親に会いに行った時に聞こえた、自分に付けられるはずだった名前』　これも却下。実感は無いし、そもそも自分の名前では無い。

「……鳴海なるみ」

迷った拳句、母の名字を借りた。戸籍も何も存在しない自分だが、娘なのだから同じ名字を名乗ってもいいだろう。

「鳴海、か。鳴海、お前、なかなか人生を送ってきたようだな」

雑談のように軽い口調で、しかし次の瞬間には真っ直ぐに疾駆。

反撃 不可能、基本的な能力では自分が劣っている。ならば、とギリギリまで腕から目を離さず、太刀筋の方向を視る。別の攻撃が来る事も考えられたが、致命的な斬撃を防ぐためなら多少の打撃は覚悟する。

横薙ぎ、そう認識した時には既に体が動いていた。ほぼ転ぶようにして足を折り畳む、両腕を支えに、すぐ体勢を整えられるような尻餅をつく。その選択は正解 横薙ぎの軌道が中途で変化し、脳天目掛けて振り下ろされた。

ギリギリで先ほどの鞘を蹴り上げ、小刀を握っていない方の腕で掴む。このような文字通り曲芸染みた真似が出来るのも母の剣術「曲芸」のおかげだ。

刃こぼれを恐れたのか、このまま押し合いの勝負になるのが好ましくなかったのか 梨恵は刃を寸前で止めた。真正面から真剣な顔で見つめあう。お互いの目を覗き込み合う。

「……やはりな。お前の目、簡単に人を斬れる目だ」

ぼつりと、非難も哀れみ込められない透明な声が響いた。

嬉々とした戦闘の空気を纏ったまま、今にも笑い出さんばかりの顔で。

「ええ、まあ。何人殺したか覚えてないツスけど」

弁解とも開き直りとも取れない透明な声が返された。

ただ目標に向かおうとする前向きで、無謀で邪気のない殺意の瞳を輝かせて。

だがそれでこそ、とばかりに梨恵の口が本当に笑みの形を作る。そのまま急に後ろに飛び退いて距離をとり再接近。急な動きで見切れない。無謀だと分かっていたいつも小刀を前へと突き出した。

切っ先が胸へと迫ると思った瞬間、手に重い響き。小刀を弾き飛ばされる。信じられない、刺突の勢いを持つ刃を、拳で払いのけた。

「　　つ！」

その弾かれた勢いのまま真横へ飛び退く。梨恵の刀が空を切るのを横目で見つつ、武士子は頭から飛び込むようにして地面を転がった。そのまま地に頭を付けた逆立ち未満の体勢。

足音で間合いを計り、そして腕を解き放った。

「はぁ！」

「飛鳥落」！  
とびとりをおとす

既に振り下ろされていた刀が肩口を削る。貫けとばかりに放った蹴りが胸元に突き込まれる。肉を切らせて骨を絶つ。とはいかないが、体勢は十分すぎるほど崩せた。背中から倒れ込むしかない無様な体勢で、梨恵の刀を持っていないほうの手首を掴む。

相手と同時に倒れこめばよし、自分が体勢を立て直せばそれもよし。そのまま手首を全力で引く張る。

「くっ　　」

自分の体を支えに利用されていると分かってもどうしようもない



梨恵。そして武士子はそのまゝ一回転、梨恵の体勢を崩しながら両足を地に着けた。

今度こそかわしもいなしも出来ないだろう、とほぼ確信を込めて鞘で顔面を狙った。一度でも隙を作れば、そこから致命傷への流れを作る。それが「曲芸」の真骨頂。一度でもこちらのペースに踏み込んだ時点で相手は終わり。今までもそうだった、今回もそうだ。そうだ、と思っていた。

「お　　おおおおお！」

だが、急に寒気　迫る死の感覚。ロクに確認もせず、身をよじる　空間ごと切り裂いたかと錯覚する、裂帛の切り上げ　冷や汗が流れ出す、あと数瞬でも行動が遅れば、数ミリでも距離が違えば、半身を持っていかれていたという確信。

体勢が崩れたのはフェイクかと考えたが、違う。ただ、闘争心と鍛錬の成せる気合の一撃。今までに戦ってきた人間とも獣とも格が違う。

頭に思考が浮かんでいく中、急に髪が解かれた。

「あ……」

あの攻防でゴム紐が千切れた。それだけだ。ただ、それだけの事実。

自分を女性と見てくれて、身なりを考えてくれた人　桜とお揃いの、髪型。

何故か、大事な糸が、音を立てて切れた気がした。崩れ落ちそうになる。気を張って耐えた。一度耐えたらどうでもよくなった。世界が形を変える。元の形に戻る。ああなんだそうか、何を躊躇っていたんだ。こんな所で言い訳じみた時間稼ぎなんて、する必要ないじゃないか。さあ　　目的を果たそう。

「……どうした？」

律儀にも足を止めて待つていた梨恵に微笑む。自然に、いつも通りに。いつも通りの　凄惨な笑みを湛えて。

「いえ、今決着をつけるのは勿体無いかと思ったんすよ。もっと修行してきますから、その時にお相手してもらえないかなあと」

嘘ではない　いつかぶつ殺してやる、そういう気持ちがある中に渦巻いている。でも今はそれよりも大きな憎悪が先に居座っていた。

「本当だろうな？」

「“獲物”を取り逃すほど人間染みてないッスから、私」

ふん、と一つ鼻を鳴らして、梨恵は刀を鞘に納めた。目先の利益に飛びつくだけの人間じゃなくてよかった、と心の底から安堵する。向こうが殺す気ではなかったとはいえ、あのままではどうなっていたかわからない。

彼女が立ち去るのを見送り、そして武士子は探す事にした。目標、標的、敵。自分の敵。

「金持ちは、嫌いだ」

ポツリと呟いた。今の自分の、そしてこれからの存在意義を。

さあ　山上鳥本を殺そう。

\*\*\*

口から荒い息が漏れていた。激しい運動のせい、ってわけじゃない。確かに少しばかり動いたけど、このぐらいで息切れするほどや  
ワじゃない。

私はこの時、人を殺した。

母から聞いた話だった、自分の生みの両親の居場所。裏づけも取  
った後に教えてくれた、自分でも彼ら本人の口から聞き出した。

先ほど白状した父親の口は、もう首ごと存在しなかった。一番協  
力的だったから一番楽に殺してあげた。生みの母と、そして私の代  
わりに食卓に付いていたとても幸せそうな間抜け面は家に残してき  
た。父親の片足を握り締めて引きずりながら、うるさく喚いていた  
父の言葉を反芻する。

ああお前は私達が捨てた娘だな目元があいつによく似ているよ後  
悔しているんだ私はやりたくなかったんだ上からの命令なんだ許し  
てくれ許してくれいやすまない許してくれなんて言わない妻だけは  
生かしてやってくれどんな罰でも私が引き受けるからああどうか妻  
だけは。

押し入り強盗になったような気分のまま、鬱々と殺した。

世界が変わると信じていた。でも何もかわらなかった。イライラ  
する。

育ての母は、娘が欲しかったただけらしかった。代金は商品自身わたしの  
命、買い取って得たのは充実した指導の時間。ああ、信じたくなか  
った。私はあの人の、暇潰しの道具。それもあの人を超えた時点  
で終わり、課程終了。私はもう、要らない子。芽生えていた連帯感  
の糸が断ち切られる。

頑張ろうと思った。今のままでも私の体は生きていけるけど、私  
の心は生きてくれない。何かを変えないといけない。生みの親を殺  
しても、心はあまり変わらなかった。大した動揺もなかった。

根本から殺さないといけない。そう、思った。

\*\*\*

その前向きな殺意にもはや曇りはなかった。山上鳥本を見つけ出して殺すという武士子の心には一点の嘘もなかった。だから背後からのいきなりの声にも驚かなかった。

「元氣そうじゃないか」

まごう事無き標的の声 聞いた瞬間、両手でそれぞれ鞘を握っている。振り向いて確認すると、そこには確かに鳥本がいた。出会った頃とまったく変わらない立ち姿で。

「……自分から出てきてくれたのは便利ッスけど、どうして私の場所が……」

「忘れたのか？ それだよ」

自分の首筋を親指で指した。そうして気付く、自分に付けられた発信機。

「ああ……じゃ、事情も何もかも全部分かってここへ？」

「随分と派手にやっているようじゃないか。家主として、一言ぐらいは言っておこうとな」

そうですか、と呟き。心は無心の殺意を満たして。すつと、自然な動きで鞘を突き出した。

「いきなりか」

そんな凶悪な行動に対して、むしろ子供の悪戯に苦笑するような軽さ。突きをいなすように手を差し出す鳥本　やはり、ただ金持ちというだけじゃない。戦いの心得がある。

そのまま鞘から力を抜き、肩からぶつかりそして小刀を振るう一連の動作　曲芸の技の一つ、「あまたれいしをうがっ雨石穿」の実行を思い浮かべた。初見で見切れるほど簡単な動きのつもりもない。

だが、鳥本の手は予測していたように鞘を無視　そして武士子の手首を掴む。力を抜くはずだったタイミングで完全に掴み取られ、片腕の自由を奪われた。

「　ッ！」

「ふん、何もかも全部かってここへ、と訊ねたのはお前だろう。ああ分かつているさ」

掴んだ腕を引き寄せ、足を引つ掛け　やられた、会話に隙を取られている内に転ばされる。

「お前がどういう戦い方をしているか、などはな。随分と変則的かつ通常の人間には実行できない動きだが　十分に普通の範疇だ。簡単に対応できる」

つまらなそうな、雑務を片付けるような、そんな手つき、目。ああ、畜生　侮られている。

その事実が許せなかった、がむしゃらに地に手を付け、その場で逆立ち。肩に足を引つ掛けた、そのまま前のめりに引き倒そうとその動きを開始しようとした所で鳥本は肩に掛けられた方と逆の足を掴む。引きずり倒す為の動作は、どういう力が働いたのかダンスでも踊るような位置の交換に。

そのまま黙っているわけにもいかない　逆立ちの体勢は急所を

晒しすぎる　　と思い片手だけに加重を掛けて相手の出方次第で体勢をすぐに変えられるように。しかしその瞬間、支えにした方の腕を足で払われる　　倒れる　　まさか　　曲芸を使ってきた、相手の体勢を崩してきた自分が逆に？

「ぐ……う」

初めて相手の前で倒れ伏す。焦り、情けなさ、嫌な感情が波になって押し寄せてくる。

「どうだ、少しは落ち着く気になったか？」

高圧的な物言い　　自分が優位に立っていると自覚している声音  
それが事実だと分かっているにしても、神経が焼け付くほどの憎し  
みを感じる。ああ、そうだ、これは憎しみだ。

「金持ちは、嫌いだ」

ぼつり、と自然と口から言葉が漏れた。

「嫌いだ……！」

堰を切ったように感情が外へ漏れ出す。俯いて倒れているおかげで顔を見られていないことが幸いだと思えた。

「どうして嫌いなんだ？」

「私を不幸にしたのは金だ！　私が親に捨てられたのは金のせいだ！　もう嫌だ、お前らの傲慢で世界の形が変わるのなんて嫌だ！　お前ら金持ちのせいで、私の人生が歪められたから、だから嫌いだ」

って言ってるんだ！」

質問に答えるというよりは、ただの叫び。空に向かって吠える顔を晒す。今の自分はこういう顔をしているだろうかなんて考えている余裕は無い。

「嘘だな」

たった一言で、叫んだ言葉の全てが否定された。

「な……っ！」

「お前、気付いていないかもしれないがな」

逆光で鳥本の顔が見えない　だが声は態度を変えないまま、耳に届き続ける。

「その顔は必死なだけだ。憎しみなんて、どこにもない」

自分の顔を見ることが出来ないのがもどかしかった。涙が出そうになって、心の中で三つ目の糸が千切れた。

一つ目は母への未練。二つ目はこの優しい世界への未練。そして三つ目は　少しの間守り続けた自分への未練。

口が勝手に動き出した、さきほどの叫びと同じように。

「子供を、殺したんです」

「ああ」

「小さくて可愛かったんです。まだ刃物が何かしらないぐらいの子

だっ たんです」

「ああ」

「お姉ちゃん何してるのって無邪気で、でも、私、思わず……知らなかつ たんです。子供が居るなんて」

武士子の話聞きながら、鳥本自身も自らの能力 スコープアイズ 読心瞳で彼女の心を覗き込んでいた。

彼女の名前と居場所を掠め取った『娘』の生みの両親 それは国の名士である魔法使いだった。国の魔法の維持を引き受け、膨大な金と地位を得た彼らの家の一つに武士子は踏み込んだ。二人を殺して、それでも何も変わらなかった。失望して、そして動くモノを殺してしまった。それは女の子だった。

武士子の家庭のように余所へ預けた子供がたまたま来ていたのだろう。とにかく、そのせいで武士子に初めての罪悪感が生まれた。恐らく敵意のないあどけないものだったからだろうが、それは武士子自身も正しく把握は出来ていないようだった。

だが一つ確かな事があつた。罪悪感を認めてしまえば、今まで無頓着に殺し続けてきた全ての命に責任を感じてしまうということ。耐えられなかった。今さらの罪悪感に、これからどうしていいのかなんて分からなかった。

だからそれは一つの言い訳に帰結する 金持ちは嫌いだ。

金持ちが嫌いだから、何の恨みもない女の子を殺した。いつもと違うのは爽快感。ほら、自分はこんなに満ち足りている！ そう言い訳しなければ生きていけない自業自得があつた。

「そして魔法使いを殺したことにより魔法が暴発 異世界へ跳ばされた、か」



記憶が消えたのはその時のショックか、はたまた暴走した魔法が彼女の痛みを消したのか。その世界の魔法という技術に通じていない鳥本には分からないが、そこは大した問題では無い。

問題は、彼女の心の決着のつけ方。

「……一つ、聞かせて欲しいッス」

鳥本と武士子が向かい合う。もはや前向きな殺意は宿らない虚ろな瞳で、問いを向ける武士子。

「何で私を気にかけてくれるんスカ？ 別にそんな義理はありませんよね？」

鳥本は小馬鹿にしたような笑みと共に答えを返す。

「面白くないからだよ、いきなり自分が選んだ人間が消えるのはな。お前は俺に拾われたんだ、ならば少しは恩を返そうとは思わないか？」

「私みたいな殺人鬼でもですか？ こんな平和な日常に私なんか？」

武士子、困惑。鳥本、平然。両者それぞれの立ち様。

「日常だよ、お前は自分の事を特別だと思っているみたいだがな。この程度では特別とは言えないぞ、元・殺人鬼 ふん、なかなか面白い個性じゃないか」

全てを悟ったようなその台詞 特別じゃない、元・殺人鬼  
それら全てが魅力的に見えてくる。その選択肢しか残されていない

ような、しかしその道はとてつもなく幸せだと思ってしまう。自分の存在が個性にしかない日常へ　奇跡的に素敵な世界へ。

だが、武士子の手の中にはもう一つの選択肢があった。全てを償わなくてもいい方法。

「……まだ、間に合います。私の心は、間に合います」

すらりと、刀を抜き放った。片手に一本のみ、鞘は持たず。曲芸における戦闘スタイルとはかけ離れた姿勢で。

「金持ちは、嫌いだ」

そう、それは鳥本によって暴かれた本心を忘れ去り、再び殺戮の道を行く事。この世界で生きていけるかどうかは分からないが、少なくとも最後の瞬間まで自分でいられる。

そんな武士子を見て、鳥本も構えた。

「それがお前の選択か……仕方ないな」

再び瞳に前向きな殺意を宿らせる武士子。静かな面持ちのまま、不動に構え続ける鳥本。

その勝負に技術も何も存在しなかった。ただ、力と読みの勝負。正面からのぶつかり合い。

リーチでは有利な武士子、だが逆に軌道が読まれやすい。だがそれでも構わず、刀を振りかぶる。今までで最大の速さ、正確さ、威力を込める勢いで渾身の突きを顔面に向かって放つ。捉えた歓喜と一抹の寂しさを感じる間もなく腕は伸びきった。

だが、頭蓋が砕けてもいなければ顔面を貫いてもいない　脅威の動体視力、それすらも予測済みという風な頬の傷。掠めて終わり、腕を引く暇は無い。体の他の部位も突きの勢いに持っていかれてい

る。防御すら出来ない。

そんな武士子の懐にもぐりこんだ鳥本。腕は、武士子の腹部を的確に捉えていた。

「霸王の、鉄槌……」

鳥本の呟きは彼女には聞こえない。体の内側を的確に、致命傷を負わさぬように破壊された彼女の意識は既に失われていた。

\*\*\*

空が光っていた。星が落ちてきたんじゃないかって思うほど、綺麗で眩しい光が目を焼いていく。

私は獣、道化者。頑張って、結局何も手に入らなかった道化者。何でこんな事をやりたかったのか分からない、でもやり遂げた。でもでも、世界は何も変わらない。

腹が立つ、憎んでいる。自分になのか他人になのか分からない。ああ、このままだとまた何か殺してしまいそう。

違う。

私は何かを手に入れた。世界は変わった。憎んでいない、澄んでいる。だからもう誰も殺さなくていい。

私は獣で、道化者かもしれないけれど、手に入れたものはあるはずだ。

\*\*\*

「私は……」

ふと、武士子は自分が眠っていた事に気づいた。自分の呟きで自分を起こしてしまったかのような錯覚。曖昧な頭のまます半身を起こす。ベッドだった。

「起きたね、ミル」

「そーだね」

唐突に声が聞こえた。自分のベッドの横。人が座ってる、だが人にしては少し影がおかしいような。

考える間もなく、手紙を手渡された。そしてそのまま武士子には一言もかけずに退室していく。不思議な人だな、と思いながらも受け取った手紙に意識を奪われる。

律儀な封筒を開封。中身は折り畳まれた一枚の紙。差出人は山上鳥本。

「ッ！」

途端、今まで起きた事の全てを思い出す。脳が覚醒する。

殺さなければ。ああでも負けてしまった。どうすればいい

果たせなかった自分は。死ねばいいのか。死ぬ。死ぬ。

ああなんにしても刃物がない。調達しないと。

頭がおかしくなったようにつらつらと考えを続ける。この胸に到来する、「罪悪感」を残らず殺してしまう方法を。ああ、死ぬしかない。

「死にたくない」

自分の口から言葉が漏れた。思わぬ言葉、思ってもいない言葉、もしくは思っただけでも抑圧された本心。

死ぬのは嫌だ。育ての母に叩き込まれた流儀が悲鳴を上げる  
生き続けられるうちは生き続ける　『まだ死んだらあかんで』。  
死ねない、じゃあ苦しみ続けろという事か。殺したきた人間の顔  
を思い浮かべつつ苦しみ続けろというのか。嫌だ、それが嫌で  
ああ畜生、天真爛漫な笑顔がまぶたに浮かぶ。そのまま千切れとん  
だ首が頭に浮かぶ。

涙が手紙を塗り潰し、自然とそちらを見てしまった。

『今日からここがお前の部屋だ』

まったく何の疑いもない断定口調　傲慢で頼もしい彼の流儀。  
涙で滲む。畜生、短い文章なのにまだ読みきれない。

次の一文、最後の一文。

『俺はお前の命を二度拾った。その命は誰かを救う為に、許す為に  
使え。まずは、一番身近な誰かを』

涙が出た。涙が止まらない。彼も、武士子が死ぬ事を許さない。  
涙が出た。嬉しいのか悲しいのかわからない涙が。

「あ……はは。私の、生き死には、旦那のものなんだ……これじゃ、  
勝手に、死ねないや……」

嗚咽が混じり、上手く独り言すら言えない。

一番身近な誰かを　『自分を救え、許せ』。難しい事を言う人  
だ、今はそれで悩んでいるのに。

信じようと思った、自分を許せる時が　罪悪感の全てが消え去  
る時が来るのを。それがいい事なのか悪い事なのかは分からないけ  
れど。自分の望む方行へ少しでも近づけるように。

「うん……」

刀の飾り布を解いて、髪を束ねた。不器用で、不恰好な、それでも自分の最大のお洒落　ポニーテール。

まずは皆に謝らないと。ベッドから立ち上がりながら計画を立てる。美緒と真遊に会って話そう、緑に礼を言おう、梨恵に戦ってもらおう。フロアやアーク、桜や空香に謝ろう。さっきの人の正体を聞いてみよう。鳥本にどんな顔して会うか考えよう。引きずり回した人は、まあいいや！

未来の事を考えながら、武士子は一步を踏み出した。自分で決めた、自分の適当極まりない名前に誇りを持ちながら。

この他愛ない日常をまっとうする為に。

## （後書き）

どうも、皆様の頭の片隅に存在しているかなあどうかあしていただいいたあ、コニ・タンです。

さて、今回は「金持ちはファンタジー！」の番外を企画でやらせて頂きました。

書いてみた感想としては「金ファンって自由だなあ」って所です。僕が勝手に考えたオリキャラがきちんと適合しましたし。

オリキャラといえば、一応この「鳴海 武士子」は鳥本の反対になるように設定しています。どこが反対なのか、死ぬほど暇な時に考えて頂ければ微妙に暇が潰せます多分。

では、この物語が「金持ちはファンタジー」の原作を読んでいる方に楽しんで頂ける事を祈って！そして作者の正体不明さんに敬意を表して！ 後書きを終わります！

……これ、壮大な「キャラ募集企画」への応募だよなあ、なんて心の片隅で思っていたりします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0490j/>

---

金ファン番外～それもまた他愛無い日常～

2010年10月21日22時56分発行